TOPICS

生物系特定産業技術研究推進機構（生研機構）国際テクノフォーラム
－牛海綿状脳症（BSE）の発見から今後のプリオン病研究展開－

平成14年10月25日（金）13時～17時35分、つくば国際会議場（エポカルつくば）大ホールにおいて生研機構主催の表記国際テクノフォーラムが開催された。（共催：（独）農業技術研究機構動物衛生研究所、後援：農林水産省農林水産技術会議事務局、畜産技術協会）

座長は品川森一動物衛生研究所プリオン病研究センター長、講演者は英国Veterinary Laboratory Agency顧問Gerald Wells博士、立石　潤九州大学名誉教授（現老人保健施設春風施設長）、横山　隆動物衛生研究所プリオン病研究センター病原・感染研究チーム長であった。

主催の生研機構小林滋副理事長より、続いて共催の動物衛生研究所清水実嗣所長よりそれぞれ挨拶があった。座長の品川森一プリオン病研究センター長の紹介後、Wells博士より「プリオン病の病態：発見者が見たBSEの神経病理学」、立石九州大学名誉教授より「プリオン病の宿主要因と病原株」、また横山チーム長より「病原体プリオン：感染する蛋白質の謎」というタイトルで講演が行われた。全講演終了後、講演者はステージに集合し、座長の司会において総合討論が行われた。各講演終了時並びに総合討論において講演者と参加者との間で活発な質疑応答が行われた。

総合討論終了後、動物衛生研究所清水所長より「動物衛生研究所のプリオン病研究に対する取り組み」について紹介があり、その中で動物衛生高度研究施設に関してその概要を報告した。最後に、後援者である　畜産技術協会山下善弘会長より閉会の辞が述べられ、本フォーラムは400名もの参加を得て、盛況のうち無事終了した。

（研究企画科主任研究官）

つくば科学フェスティバル2002に参加して

10月12日（土）と13日（日）、つくばカピオにおいて、つくば科学フェスティバル2002が開催されました。つくば市の主催ですが、今年はつくば市および茎崎町の合併記念並びにつくば市制15周年記念事業として企画されました。参加は49機関（61ブース）で、農林研究団地からは畜産草地研究所、農業生物資源研究所、農業工学研究所、森林総合研究所と当所の５機関が参加しました。

当所では、「小さい世界をのぞいてみよう」のテーマのもとに出展し、次コーナーを設けました。

「ウサちゃんの心音　聞こえる？」

１）いろいろな細菌をのぞいてみよう。
（手のひらにいる細菌を培養して観察する）
２）サナダムシやダニを知っていますか？
（標本の展示・実物の観察）
３）顕微鏡をのぞいてみよう。
（BSEの病変組織をみる）
４）ウサギの心音をきいてみよう。

当日は家族連れ方が多く、細菌のコーナーでは、初日に培地に手形を押してもらい、翌日それを展示しましたが、押した手の輪郭どおりに細菌が増殖している様子に、皆目を丸くしていました。また、珍しいサナダムシの標本には、むしろ大人の方が見入っていました。落ち着いてきたとはいえBSEについての関心はまだまだ高く、多くの人が真剣に顕微鏡を覗いたり、担当者の説明に聞き入っていました。前回に続いての企画「ウサギの心音をきいてみよう」は相変わらず人気があり、幼児から大人までも順番待ちの行列をしていました。

2日間の当所ブースの来訪者は約500人弱ですが、フェスティバル全体ではのべ8000人を超えたと事後に発表がありました。夏から事前準備をしてくださった委員をはじめ、ご協力いただいた多くの方々に心からお礼を申し上げます。

（広報委員会事務

TOPICS

サイエンスキャンプ 2002 終わる

8 月 6 日からの 3 日間、北は群馬から南は福岡までの若さあふれる高校生 8 人をサイエンスキャンプに迎え入れました。

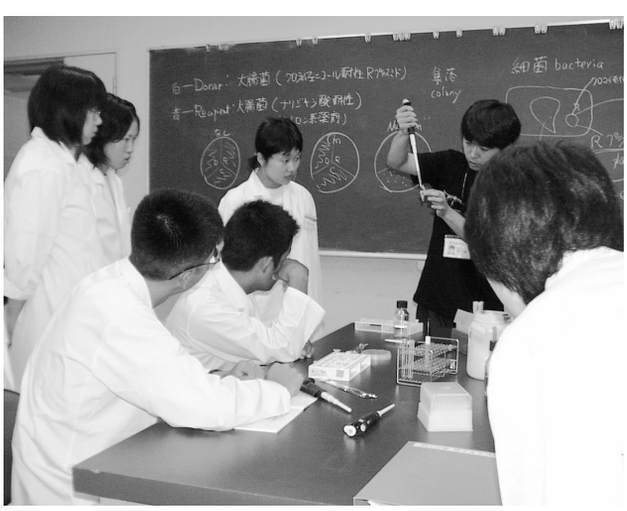
科学技術庁、科学技術振興事業団、　日本科学技術振興財団及び受け入れ機関を主催者として平成 7 年度から実施されてきたサイエンスキャンプは、平成 13 年度からは、独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センターに創設された「子どもゆめ基金」の助成事業の一つとして実施されています。「子どもゆめ基金」には政府出資金と民間寄付金があてられ、助成金を得て活動をしようとする団体が応募し、審査を受ける形となっていますが、応募件数の増加につれて、審査結果が出るのが遅く、決定見込みということで実施に移されました。したがって、いろいろなことが日程に余裕のないまま行わざるを得ない状況でした。今年度の主催者は　日本科学技術振興財団及び受け入れ機関です。

農林研究団地からは、中央農業総合研究センター、作物研究所、果樹研究所、農業生物資源研究所、農業環境技術研究所、農業工学研究所、森林総合研究所及び当所の 8 機関が参加したほか、東北農業研究センターが初めて参加しました。

今年は参加者募集の期間が短かったにもかかわらず、当所には 32 名もの参加希望がありました。参加者は次の方々です。

神澤児太朗（3 年）　柏原　佑美（1 年）
伊藤　祥子（3 年）　鴻巣　　睦（3 年）
丸山　祐佳（2 年）　手島　悠美（3 年）
佐俣　利枝（2 年）　平瀬　暁也（3 年）

参加の動機や将来の夢は、「獣医になりたい」「畜産をやりたい」などさまざまでしたが、みな動物好きの方ばかりでした。



薬剤耐性の伝達を観察する実習風景

今年のカリキュラムは次のとおりとしました。カッコの中は指導講師です。

8 月 6 日（火）
開講式・オリエンテーション
高速液体クロマトグラフによる血液中ビタミン濃度の測定（安全性研究部毒性物質制御研究室　宮崎　茂）

8 月 7 日（水）
遺伝子を操作する
㈰薬剤耐性の伝達を観察する
（感染病研究部病原細菌研究室　関崎　勉・高松大輔）
㈪光る遺伝子(免疫研究部免疫制御研究室　下地善弘）
診察の基礎㈰（生産病研究部病態生理研究室　堀野理恵子、新井鐘蔵）
診察の基礎㈪（生産病研究部臨床繁殖研究室　吉岡耕治、鈴木千恵、岩村祥吉）
懇親会

8 月 8 日（木）
遺伝子を操作する㈰㈪（結果の観察）
家畜の病気を診断する（感染病研究部感染病理研究室　播谷　亮、木村久美子）
まとめ・閉講式

参加者は、これらの各講義や実習をとおして、動物衛生研究所で行なわれている研究の重要性や、範囲の広さ、緻密さと正確さが要求される実験、愛情とともに細心の注意が必要な動物とのふれあいなど、多くのことを、新鮮な驚きの中で体感したようでした。開講式では緊張の面もちだった研修生もすぐに打ちとけ、それぞれの方言も交えて楽しく会話しながら実習に取り組んでいました。２日目の「診察の基礎」で、自分の十倍もある大きな牛の直腸検査をしている様子は、朝日新聞の１面に取り上げられ全国に紹介されました。

閉校式では修了証書を手に、「講師の先生が優しく親切に教えてくれた、いろいろな方の話をきくことができ、進路のためにもなって大変によかった、今までの勉強不足がよくわかった、楽しくてもっといたかった、あっという間の３日間だった」等の感想が述べられました。参加者にとっては充実した３日間だったようです。多忙な中で、このサイエンスキャンプにご協力くださった講師をはじめ関係者の皆さまにお礼を申し上げます。

（広報委員会事務局）